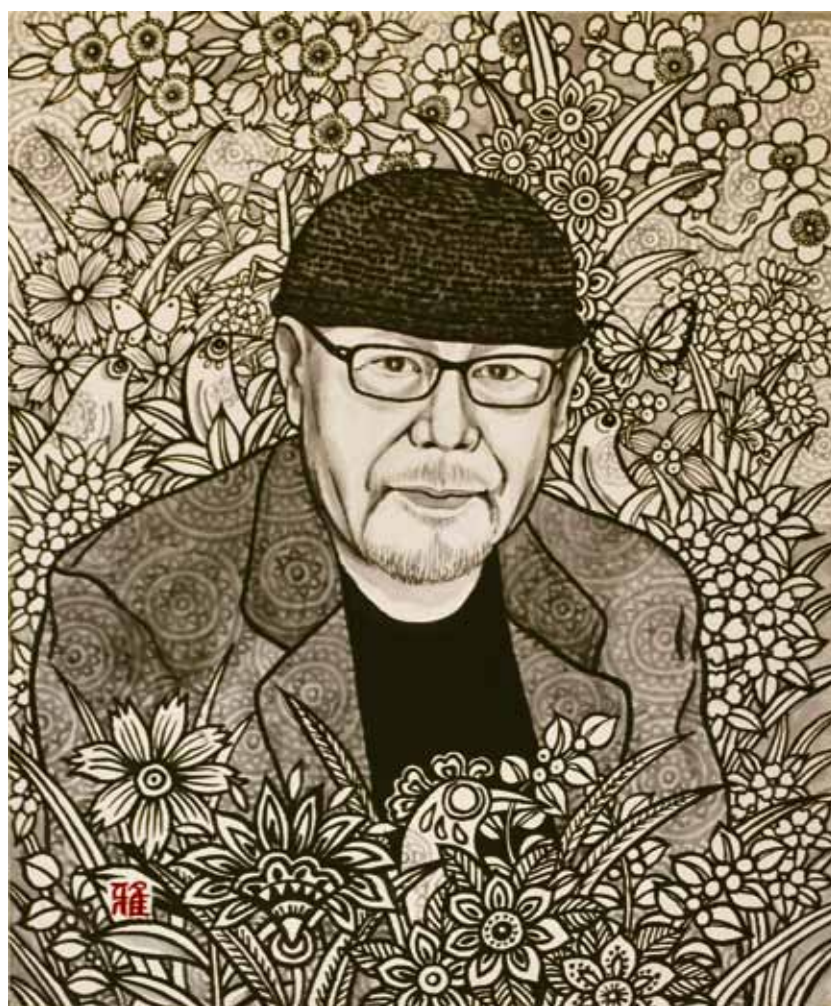


井堂雅夫 4月23日永眠

井堂雅夫は、2014年7月、末期がんが発覚し、医師からあと半年から一年の命との宣告を受けました。抗がん剤による治療で病氣と闘いながらも、沢山の作品を描き上げ、2014年11月には「画業40周年記念展」を故郷である岩手で開催し2015年11月には「絵師 井堂雅夫 琳派を描く」と題した展覧会を京都文化博物館で開催しました。

その後、入院治療の間も、時間がもったいないと、病室に仕事道具を持ちこんで絵を描き、最後まで常に前向きに食事も忘れるほど制作に打ち込んでまいりましたが、2016年4月23日、永眠いたしました。生前には沢山のご支援をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。



2016年1月、自らの遺影にと、制作した自画像

32年にわたりお送りしてきたギャラリーニュースは今回で一旦終了となりますが、今までにいただいた皆様とのお縁を大切に、ギャラリー雅堂はこれからも父の作品をご覧頂ける場所として続けてまいります。

作品に関するお問い合わせはご来廊の際はもちろん、お電話、メール、ファックスにてお気軽にお問合せくださいませ。ご要望に応じたご提案をさせていただきます。

今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

ギャラリー雅堂 井堂雅之

井堂雅夫 1945 - 2016

描くことは生きること



花巻のアトリエで襖絵制作



9人の彫師・摺師と共に談笑しながら制作



永観堂奉納作品制作



画業40周年出品屏風制作

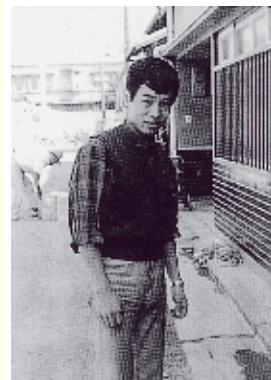


墨一色の作品に下絵はない

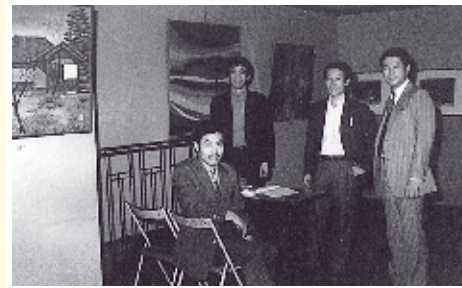
井堂雅夫は、当時満州と呼ばれていた中国大陸で1945年11月11日、8月の終戦から3か月しかたない混乱の中で生まれ、翌年、母に背負われたままで生死も確認できないほどの過酷な困難を乗り越えて日本に戻りました。母は「生きて帰国できたことが不思議なくらい、よほど運の強い子」と事あるごとに申しておりました。

帰国間もなく、父の仕事で移り住んだ岩手での子供時代は、大自然に抱かれ、近所の子供たちと山や川で遊びに夢中になり、暗くなるまで帰らない元気な子供であったと聞いています。そしてその頃から絵を描くことが大好きで得意だったようです。

近所の自動車修理工場の前に一日中座り込んで眺めていたと思うと、いつの間にかそれが絵になって絵画コンクールに入賞、朝礼で校長先生から賞状をいただくのはいつものことだったようです。ものがない時代でしたので、賞状よりも副賞のクレパスや色鉛筆をもらえるのが、何より嬉しかったと話していました。



染色家の内弟子となる。17歳



初個展（手前着席 25歳）

中学を卒業後、京都に移り、工員として就職することが決まっていたが、好きな絵を描く仕事がいいのではと、祖父が世話をしてくれた染色作家の元で、住み込みの内弟子となりました。犬の散歩や師匠のお子さんのお守りから始まり、反物を持って使い走りをするようになると、15歳の子供ですので仕事先の皆さんからおやつをもらったり、やさしい言葉をかけられて可愛がられたようです。

今思えば、この選択がなければ後の井堂雅夫はなかったのかもしれない。

修業を終えた20代の初め、井堂雅夫は染色工房を開いて独立しました。

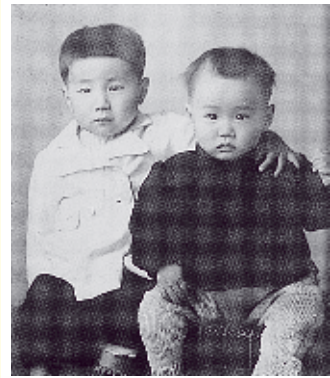
東京オリンピックを成功させ、めざましい経済復興の中にあつた活力にあふれた当時の日本で、屋は10人ほどの職人たちと共にきものを染め多忙を極める中でも、夜はいつかプロの絵描きとして認められたいと絵を描く生活を送っていました。そんな時、友人の画家から紹介された画商に、「木版画をやってみないか」と勧められ、作品創りに取り組むようになりました。この時から井堂雅夫は染色の他にもうひとつ、新しい表現方法を手に入れることとなりました。



震災後の陸前高田市「一本松」



スケッチと写真を元に作品制作



雅夫（右）1歳 兄と共に



雅堂小袖ショー（東京・キュージュー資生堂）

30代に入り、次第に絵を描くことが本業になり、彫り師と摺り師とともに制作した木版画作品は生涯で1400種類を超えました。

そして創作活動が続ける中で、染色や木版画など衰退していく京都の伝統技術を次代につなげていくことの重要性を感じ、それが自分に与えられた役割であり、使命だと考えるようになりました。

「染色でも木版画の世界においても、作家である自分は、絵を描くというゼロからものを生み出すのが仕事である。そしてそれは職人が持つ技に支えられている。だからこそ自分の創る作品をできるだけたくさんの人に買ってもらう事で、職人の生活を支えて、その伝統の技を次の世代につなげるために役立ちたい、それが自分の使命だ」と語り、自分のできることを実践していきました。版画教室を開き、NPO を立ち上げ、テレビや新聞で語り、本気で自身の使命を全うしようと走りつづけた生涯でした。

美術大学を卒業したわけでもなく、画壇と呼ばれるものに属することもなかった井堂雅夫でしたが、逆に何にも縛られることなく自由に、そして身軽に独自の技法や道具を使って作品を創り、国内外の各地で個展を開き、発表を続けて来られたのは、本人の生き方に、とても合っていたように思います。

70年にわたる人生のすべてを、「絵を描くこと」だけで表現してきたこと、自分の信じる道を一生懸命走り続けてきた姿は、私が井堂雅夫の母から聞かされていた、三兄妹で夢中になった自作自演のお芝居やのど自慢大会、近所の友達と裏山に作った秘密基地の洞穴作りやターザンごっこなど、みんなで一緒に何かに夢中になり、にぎやかなことが大好きだった、何事にも一生懸命な子供のころそのままの姿に重なります。



アトリエ・工房見学ツアー



NHK 趣味悠遊 神戸異人館での収録風景



岩手県花巻市の農家あとにアトリエ開設。
特定非営利活動法人 花巻文化村設立



平成版浮世絵京都百景制作風景



インターナショナルスクール生徒の年賀状教室



ギャラリー雅堂開廊 1982年



絶筆となった肉筆画『極楽浄土』2016年3月

振り返れば、井堂雅夫は、いつも多くの人たちに支えられてきました。日本をはじめ、世界中の、10万人を超えるであろうコレクターの皆様、その方々へ作品を紹介し販売して下さった画廊や百貨店、美術販売会社の皆様、井堂雅夫の活動をさまざまな形で支え、広めて下さった行政や企業、マスメディアの皆様、たくさんの応援者、後援会、友人のみなさま、そして彫り師・摺り師、雅堂会、株式会社雅堂の歴代スタッフ、花巻文化村の皆様、そのほか今までに井堂雅夫がご縁をいただいたすべての方々に、お力をいただいたことを深く感謝し、故人に変わり、スタッフ、家族一同、心から厚くお礼申し上げます。ギャラリー雅堂は長男の雅之が引き継いでまいりますので、変わらぬお力添えをいただきますよう、よろしく願いいたします。

みなさま、本当にお世話になりました。

ありがとうございました。

井堂きよの

